

論文番号 36

担当

滋賀医科大学 福祉保健医学講座

題名 (原題/訳)

Locomotor disability in a cohort of British men: the impact of lifestyle and disease

イギリス男性における運動機能に関する前向き研究：生活習慣と疾患に関わる影響

執筆者

Shah Ebrahim, S Goya Wannamethee, Peter Whincup, Mary Walker and A Gerald Shaper

掲載誌 (番号又は発行年月日)

International Journal of Epidemiology 2000;29:478-486

キーワード

運動機能、生活習慣、危険因子、循環器疾患

要旨

背景

寿命の延長とともに、高齢者の寝たきりの数が増加する可能性がある。高齢者において寝たきりの数を減らしていくためには、早い時機からの予防と生活習慣の改善が必要である。今回、男性40歳から59歳を対象にして、生活習慣と危険因子、運動機能との関連を前向きに12年から14年追跡し、どのような生活習慣が身体障害に影響を及ぼすかを明らかにした。

方法

1978年から1980年に循環器疾患に関する研究をイギリス24の町で、40歳から59歳の男性7,735名に対して実施した。現在は5,717名で継続されており、生存者の88%がより詳細な追跡が可能である。この追跡可能な者に対して、1992年に運動機能障害の状況について追跡調査した。

結果

運動機能障害と循環器疾患既往との間に強い関連があった。特に脳卒中と診断された者の6割は日常の活動能力が低下しており、狭心症では約半分が活動能力の低下を示した。生活習慣では喫煙状況、肥満度とともに、飲酒量は運動機能障害と強い関連を示した。年齢と主な生活習慣（喫煙状況や肥満度、社会階級、仕事強度）を考慮した飲酒量と運動機能障害とのオッズ比は、時々飲酒する群を1とした場合、中程度の飲酒群は1.2倍(1.0-1.4)、一日に8~10gの純アルコールを飲酒する多量飲酒者は1.3倍(1.1-1.7)であり、全く飲まない群は1.4倍(1.0-1.8)であった。多量飲酒者と循環器疾患発症とのオッズ比は1.5倍(1.0-2.2)、悪性新生物に対する多量飲酒のオッズ比は1.0倍(0.7-1.4)であった。

結論

喫煙状況、肥満、仕事強度とともに多量飲酒は運動機能障害に強い影響を及ぼすことが明らかになった。また、多量飲酒は、主な循環器疾患発症に強い影響があることが示された。これらの知見より、適量の飲酒が疾患の上でも身体障害の上でも重要な要因であり、高齢社会をむかえるにあたって健康寿命の点から生活習慣の是正が大切であることが分かった。